

『大智度論』における仏の十力の研究

－「仏の衆生救済の側面」と「仏の凡夫・声聞に対する優位性の側面」を中心として－

那 須 円 照

要旨

本論攷では、『大品般若経』の註釈書である『大智度論』における、仏の十力を詳細に論じている「巻第二十四」の内容について考察する。仏の十力とは、部派仏教では、仏の十八不共法に収められ、仏陀特有の智力とされる。『大智度論』でも、仏陀の十力の凡夫・声聞の力に対する優位性が随所に説かれている。「巻第二十四」の結びにおいて、声聞法によって十力の内容を説いた、と述べられているが、『大智度論』では、アピダルマ的記述にとどまらず、般若中観系の思想も随所に現れている。

本論攷では、仏の十力の内容について概説している部分をまず検討し、十力の各論と補足においては、「仏の衆生救済（利他）の側面」と、「仏の凡夫・声聞に対する優位性を述べた側面」に重点を置いて考察する。その中で、大乘仏教的な思想がみられるところには特に注目していきたい。十力すべての検討は、今回は差し控える。

仏の十力とは、浄土教的に言えば、菩薩が成仏した後の還相の立場で発揮されるものである。本論攷はインド大乘仏教の宗教文化としての仏陀論の考察とも言えるのである。

また、十力のまとめの記述において、仏が清浄な説法をなされれば、光明が衆生の愚闇を破る、という表現が見られたが、これは、後代の親鸞の『教行信証』冒頭の「総序」の御文の「無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」という浄土教的な表現の元になっていないかとも思われた。また、続く「自然に大名称有り」という表現は、浄土教の阿弥陀仏の名号の功德力用の思想につながるのではないだろうか。

最後に、部派仏教の十力思想との比較が、今後の課題となるであろうと思われる。

キーワード 是処・不是処力、業法智力、性智力、宿命智力、生死智力、漏尽智力

1. 序

本論攷では、『大品般若経』の註釈書である『大智度論』における、仏の十力を詳細に論じている「巻第二十四」の内容について考察する。仏の十力とは、部派仏教では、仏の十八不共法に収められ、仏陀特有の智力とされる。『大智度論』でも、仏陀の十力の凡夫・声聞の力に対する優位性が随所に説かれている。「巻第二十四」の結びにおいて、声聞法によって十力の内容を説いた、と述べられているが、『大智度論』では、アピダルマ的記述にとどまらず、般若中観系の思想も随所に現れている。

本論攷では、仏の十力の内容について概説している部分をまず検討し、十力の各論と補足においては、「仏の衆生救済（利他）の側面」と、「仏の凡夫・声聞に対する優位性を述べた側面」に重点を置いて考察する。その中で、大乘仏教的な思想がみられるところには特に注目していきたい。十力すべての検討は、今回は差し控える。

仏の十力とは、浄土教的に言えば、菩薩が成仏した後の還相の立場で発揮されるものである。本論はインド大乘仏教の宗教文化としての仏陀論の考察とも言えるのである。

2. 仏の十力とは何か

『大智度論』において、仏の十力が概説されているが、それをまず検討する。

仏十力者。是処不是処如実知一力也。知衆生過去未来現在諸業諸受法。知造業処知因縁知果報二力也。知諸禪解脱三昧定垢浄分別相如実知三力也。知他衆生諸根上下相如実知四力也。知他衆生種種欲五力也。知世間種種無数性六力也。知一切道至処相七力也。知種種宿命。共相共因縁一世二世乃至百千世劫初劫尽。我在彼衆生中如是姓名。飲食苦楽寿命長短。彼中死是間生是間死還生是間。此間生名姓飲食苦楽。寿命長短亦如是八力也。仏天眼淨過諸天人眼見衆生死時生時端正醜陋。若大若小若墮惡道若墮善道。如是業因縁受報。是諸衆生惡身業成就。惡口業成就。惡意業成就。謗毀聖人邪見邪見業成就。是因縁故身壞死時入惡道。生地獄中。是諸衆生善身業成就。善口業成就。善意業成就。不謗聖人正見正見業成就。是因縁故身壞死時入善道生天上九力也。仏諸漏尽故。無漏心解脱。無漏智慧解脱。現在法中自識知我生已尽持戒已作後有尽。如実知十力也。(大正25.p.235.c-236.a)

仏の十力とは、< 1 > 是処と不是処とを實の如く知るは一の力なり。< 2 > 衆生の過去・未来・現在の諸の業、諸の受法を知り、造業の処を知り、因縁を知り、果報を知るは二の力なり。< 3 > 諸の禪と解脱と三昧と定を知り、垢浄の分別の相を實の如く知るは三の力なり。< 4 > 他の衆生の諸根を知り上下の相を實の如く知るは四の力なり。< 5 > 他の衆生の種類の欲を知るは五の力なり。< 6 > 世間の種類の無数の性を知るは六の力なり。< 7 > 一切の道の至る処の相を知るは七の力なり。< 8 > 種類の宿命、共相共因縁、一世二世乃至百千世、劫初、劫尽に、我、彼の衆生の中に在っては、是の如き姓名、飲食、苦楽、寿命の長短なりき、彼の中に死して是の間に生じ、是の間に死して還た是の間に生じ、此の間の生の名姓、飲食、苦楽、寿命の長短も、亦、是の如しと知るは、八の力なり。< 9 > 仏の天眼の清きこと諸の天・人の眼に過ぎたり。衆生の死時・生時、端正・醜陋、若しくは大、若しくは小、若しくは惡道に墮ち、若しくは善道に墮ち、是の如きの業因縁にして報を受くるを見る。是の諸の衆生は、惡の身業を成就し、惡の口業を成就し、惡の意業を成就し、聖人を謗毀する邪見もて、邪見の業を成就し、是の因縁の故に身壞して死する時、惡道に入り地獄の中に生ず。是の諸の衆生は善の身業を成就し、善の口業を成就し、善の意業を成就し、聖人を謗らざる正見もて、正見の業を成就し、是の因縁の故に身壞死する時、善道に入り、天上に生ずるを見たまうは、九の力なり。< 10 > 仏は諸の漏尽くるが故に、無漏心解脱と、無漏智慧解脱とをもて、現在の法の中に自ら「我が生は已に尽き、持戒已に作り、後有尽きたり」と識知する如実の知は、十の力なり。

この十力の概説において、十力の個別名称は挙げられず、一力、二力と述べられ、その直前に、具体的内容が示されていることに注意されたい。

< 1 > 「是処・不是処力」とは、是・非の理を如実に分別する力である。< 2 > 「業報智力」とは、衆生の過去・未来・現在の諸業・受法・業を造る処・因縁・果報のプロセスを知る力である。⁽¹⁾ < 3 > 「禪定解脱三昧浄垢分別智力」とは、禪と解脱と三昧と定を知り、浄垢の分別相を如実に知る力である。< 4 > 「知衆生上下根智力」とは、他の衆生の諸能力を知り、上下の相を如実に知る力である。< 5 > 「知衆生種種欲智力」とは、他の衆生の種々の欲を知る力で

ある。〈6〉「性智力」とは、世間の種々の無数の性を知る力である。〈7〉「一切至処道智力」とは、一切の道の至る処の相を知る力である。〈8〉「宿命智力」とは、種々の宿命・共相共因縁、劫初から劫尽に至るまでの一世二世乃至百千世の間、自と他の衆生が、彼に死して是に生じ、是に死してまた是に生じるときに、姓名・飲食・苦楽・寿命の長短を知る力である。⁽²⁾〈9〉「生死智力」とは、仏の天眼であり、清きことは諸天・人を超えている。衆生の死時・生時、端正・醜陋、邪見・悪業によって悪道に堕ち、正見・善業によって善道に堕ちること、つまり、特定の業因縁によって果報を受けるのを見る力である。〈10〉「漏尽智力」とは、仏は諸々の漏（煩惱）が尽きるから、無漏心解脱と無漏智慧解脱によって、現世において、自ら「我が生は已に尽き、持戒は已に作り、後有は尽きたり」と如実に識知する力である。以上が、仏の十力の概説である。

3. 十力のそれぞれの特質（十力各論）

次に、十力の各論が述べられる。以下、その中で、仏の十力のそれぞれの声聞・凡夫などと異なる不共性に着目して、利他的な面にも注意しながら、主に各力の結論の部分を中心に検討する。今回は、仏の利他的面と優位性の面が見られる六力のみ限定して論じた。

3-1. 是処・不是処力

まず、「是所・不是処力」の結論の部分を検討する。

仏知是処無是処。分別籌量可度者為說法。不可度者為作因縁。譬如良医知病可治不可治。声聞辟支仏所知少少故或不応度者欲度。如首羅応度而不度。如舍利弗所不度者。是仏無是事。無能壊無能勝。悉遍知故是名初力。（大正25.p.237.c）

仏は是処無是処を知って分別籌量し、度す可き者には為に法を説き、度す可からざる者には為に因縁を作したまう。譬えば良医の病の治す可きと治す可からざるとを知るが如し。声聞、辟支仏は知る所、少少なるが故に、或いは応に度すべからざる者を度せんと欲す。首羅の応に度すべきを度せざるが如く、舍利弗の度せざる所の者の如し。是の仏は是の事無し。能く壊するもの無く、能く勝るもの無し。悉く遍知したまうが故なり。是を初力と名づく。

仏は、「是処・不是処力」を具足しているから、良医が治すことができる者とできない者を知るように、済度できる者のために教えを説き、済度できない者のために因縁をなされる。済度できない者も仏の因縁によって最終的には済度できるという仏の大慈悲が感じられる。

声聞や辟支仏（独覚）は知るところが少々であるから、済度すべきでない者を済度しようと欲する。首羅（八夜叉の一）が済度すべき者を済度せず、舍利弗が済度しない者があるように。

以上の説明により、すべてを済度しようとされる仏と、不完全な済度しかできない声聞・独覚などとの区別が明快になされているから、仏の優位性が説かれることが分かる。「度」という言葉に、此土から彼土（西方極楽浄土）へ衆生を渡すという浄土教的表現が見られる。これは大乘の利他精神の発現である。後代の親鸞が『大智度論』を西をほめる論であるとする理由である。

3-2. 業報智力

次に、「業報智力」の結論の部分を検討する。

如阿羅漢、捨是身著故得阿羅漢道。如是等種種罪福業報。転報亦応如是知。知声聞人但知悪業罪報善業福報。不能如是細分別。仏悉遍知是業及業報。智慧勢力無碍無尽無能壊故。是

名第二力。(大正25.p.238.b-c)

阿羅漢の如きは是の身の著を捨つるが故に阿羅漢道を得。是の如き等種種の罪福の業報が、報を転ずることも、亦、応に是の如く知るべし。声聞の人は、但だ悪業の罪報、善業の福報のみを知って、是の如くに細に分別すること能わず、と知る。仏は悉く遍く是の業及び業報を知りたまう。智慧の勢力の無碍無尽にして、能く壊すること無きが故なり。是を第二の力と名づく。

阿羅漢は、身体に対する執着を捨てているから、阿羅漢道を得る。この場合の阿羅漢とは釈尊のことであろう。仏陀釈尊は、種々の罪福の業が果報を転ずることも知る。

声聞は、悪業の罪報・善業の福報のみを知るだけで、細かく分別して知ることができない。

以上の説明により、善悪業からの罪福報をおおざっぱに知る声聞よりも、仏の方が、善悪業からの罪福という報が転じること、すなわち、その結果の生起の「はたらき」⁽³⁾の詳細に到るまで細かく知るといふ仏の優位性が明確に分かる。

3-3. 性智力

次に、「性智力」について検討する。まず、「性智力」による衆生済度(衆生救済)について言及されているところを検討する。

復次仏用は種種性智力。知是衆生可度は不可度。是今世可度は後世可度。是即時可度。是異時可度。是現前可度。是眼不見可度。是人仏能度。是人声聞能度。是人共可度。是人必可度。是人必不可度。是人略説可度。是人広説可度。是人略広説可度。是人讃嘆可度。是人折伏可度。是人将迎可度。是人棄捨可度。是人細法可度。是人麁法可度。是人苦切可度。是人軟語可度。是人苦軟可度。・・・(大正25.p.239.c)

復次に、仏は是の種種の性智力を用いて、是の衆生は度す可く、是は度す可からず、是は今世に度す可く、是は後世に度す可く、是は即時に度す可く、是は異時に度す可く、是は現前に度す可く、是は眼に見ずして度す可く、是の人は仏能く度せん、是の人は声聞能く度せん、是の人は共に能く度す可く、是の人は必ず度す可く、是の人は必ず度す可からず、是の人は略説して度す可く、是の人は広説して度す可く、是の人は略広説して度す可く、是の人は讃嘆して度す可く、是の人は折伏して度す可く、是の人は将に迎えて度す可く、是の人は棄捨して度す可く、是の人は細法もて度す可く、是の人は麁法もて度す可く、是の人は苦切して度す可く、是の人は軟語もて度す可く、是の人は苦と軟とをもて度す可く、・・・

内容が明快であるので説明は省くが、仏は、種々の性智力によって、諸衆生をさまざまな仕方で済度するのである。この場合、本箇所では、一切衆生を平等に済度するのではなく、種々さまざまな済度の仕方が説かれる。済度することができる衆生と、済度することができない衆生がいるという表現は、浄土教などで説かれる一切衆生を救うという阿弥陀仏の本願力の救済のレベルには到っていないと言える。性智力の利他精神には、聖道門的限界が見られる。

次に、「性智力」の結論の部分を検討する。

如是等種種分別。五道四生三聚仮名障衆入界。善根不善根。諸結使地業果。是可度は不可度滅智分別。以如是等分別。知世間種種別異性。得無碍解脫。如是等種種別異仏悉遍知。無能壊無能勝。是名第六力。(大正25.p.240.a)

是の如き等種種に、五道・四生・三聚・仮名・障・衆・入・界・善根・不善根、諸の結使・地・業・果を分別し、是は度す可く、是は度す可からずと滅智もて分別したまう。是の如き

等分別するを以て、世間の種種の別異の性を知りて、無碍解脱を得、是の如き等の種種の別異を、仏は悉く遍く知り、能く壊するもの無く、能く勝るもの無し、是を第六力と名づく。

仏は、「性智力」によって仏教のさまざまなカテゴリーの区分を分別され、世間の種々の別異性をお知りになり、済度することができる衆生と、済度することができない衆生を、滅智によって分別なされる。そして、無碍解脱⁽⁴⁾を獲得され、種々の別異を悉く遍く知りたまう。ここでも、済度できる衆生とできない衆生を区別すると述べられているが、それは滅智によるとされている。滅智とは、滅諦に迷っておこる煩惱を断じる智である。これは、後で出てくる漏尽智力とも通ずる概念である。仏といえども、すべての衆生の煩惱を滅智で断じることができず、衆生によって区別されるのであろうか。性智力には利他面の限界が見られる。

3-4. 宿命智力

次に、「宿命智力」を検討する。最初に、宿命について、凡夫人、声聞人（＝仏弟子）、仏の違いが明記されているので、それを検討する。

宿命智力者。宿命有三種。有通有明有力。凡夫人但有通。声聞人亦通亦明。仏亦通亦明亦力。所以者何。凡夫人但知宿命所経。不知業因縁相続。以是故。凡夫人但有通無有明。声聞人知集諦故。了了知業因縁相続生。以是故。声聞人亦有通亦有明。若仏弟子先凡夫人時。得宿命智。入見諦道中知集因縁。第八無漏心得断見故。通變為明。所以者何。明名見根本。若仏弟子先得聖道。後宿命智生。亦知集因縁力故通變為明。（大正25.p.240.a-b）

宿命智力とは、宿命に三種有り。有通、有明、有力なり。凡夫人は但だ通のみ有り。声聞人は亦、通もあり亦、明もあり。仏は亦、通もあり、亦、明もあり、亦、力もあり。所以は何んとなれば、凡夫人は、但だ宿命の経る所を知って、業因縁の相続を知らず。是を以ての故に凡夫人は、但だ通のみ有って明有ること無し。声聞人は集諦を知るが故に、了了に業因縁の相続生を知る。是を以ての故に声聞人は亦、通も有り、亦、明も有り。仏弟子の若きは、先ず凡夫人の時に宿命智を得、見諦道の中に入って集の因縁を知り、第八の無漏心に見を断ずることを得るが故に、通、変じて明と為る。所以は何んとなれば、明は見の根本に名づくるをもってなり。仏弟子の若きは先に聖道を得て、後に宿命智を生じ、亦、集の因縁力を知るが故に、通、変じて明と為るなり。

凡夫人には、「通」のみがある。声聞人には、「通」と「明」とがある。仏には、「通」と「明」と「力」とがある。

凡夫人は、ただ宿命の処（前世の場所）のみを知って、業因縁の相続を知らない。よって、凡夫人には「通」のみあって、「明」がない。

声聞人は、集諦（苦の原因）を知るから、明瞭に業因縁の相続生を知る。よって、声聞人には通も明もある。声聞人は、凡夫人の時に、宿命智を得て、見諦道に入って、集（苦の原因）の因縁を知り、第八智の無漏心（見道の第十六瞬間目：八忍・八智の最後＝修道の最初）で、見を断じることができるから、「通」が変じて「明」となる。

また、声聞人の中には、先に聖道を得て、後に宿命智を生じ、集の因縁力を知るから、「通」が変じて「明」となる場合もある。

次に、仏の「力」について説かれた結論の部分を検討する。

問曰。通明義如是。云何為力。

答曰。仏用是明。知己身及衆生無量無辺世中宿命因縁所更種種悉遍知。是為力。無能壊無

能勝。是名第八力。（大正25.p.240.b）

問うて曰く。通・明の義は是の如し。云何が力と為すや。

答えて曰く。仏は是の明を用いて、己身及び衆生を知りたまふこと、無量無辺なり。世中の宿命因縁は、更に種種に遍く知りたまふ所なり。是れを力と為す。能く壊するもの無く、能く勝るもの無し。是を第八力と名づく。

仏は「明」を用いて、自分と他の衆生を無量無辺に知りたまふ。さらに、「力」によって、世間の中の宿命因縁を種々に遍く知りたまふ。

以上の説明から、凡夫の「通」から声聞の「明」を経て仏の「力」へと宿命について知るレベルが上がっていることが分かる。仏は自他の宿命因縁を知り尽くすが、凡夫や声聞は、それぞれ前世の場所や、過去世の生の原因を知るが、自己のみに限られ、他へは及ばないようである。たとえ少しは及んでも、不完全であろう。仏は他を知り尽くすから、完全な利他行が行えるのである。

3-5. 生死智力

次に、「生死智力」を検討する。ここでは、この力の特色である天眼について、凡夫・声聞・辟支仏（独覚）・仏の違いが、さまざまな観点から詳しく述べられている。

生死智力者。仏用天眼見衆生生死処。凡夫人用是天眼。極多見四天下。声聞人極多傍見小千世界上下亦遍見。

問曰。大梵王亦能見千世界有何等異。

答曰。大梵王自於千世界中立則遍見。若在辺立則不見余処。声聞人則不爾。在所住処常見千世界。辟支仏見百千世界。諸仏見無量無辺諸世界。凡夫人天眼智。是通而非明亦如是。但見所有事。不能見隨業因縁受生。如宿命申説。

復次得天眼人中最第一者阿泥盧豆。色界四大造色半頭清淨是天眼。仏天眼四大造色遍頭清淨。是為差別。

復次声聞人所住於三昧中得天眼。即所住於三昧中能見。若有覺有觀三昧。若無覺有觀三昧。若無覺無觀三昧。仏隨所入三昧中住欲見盡見。若依無覺無觀三昧中得天眼。入有覺有觀三昧。若無覺無觀三昧中。亦能見。

復次声聞人用是天眼見時。所住三昧中心入余三昧天眼則滅。仏則不爾。心雖入余三昧天眼不滅。是智慧遍知一切衆生生死所趣。無能壊無能勝。是名第九力。（大正25.p.240.b-c）

生死智力とは、仏は天眼を用いて、衆生の生死の処を見たまふ。凡夫人は是の天眼を用いて、極めて多くして四天下のみを見、声聞人は極めて多くとも、傍らに小千世界を見、上下亦、遍く見る。

問うて曰く。大梵王も亦、能く千世界を見る。何等の異有りや。

答えて曰く。大梵王は自ら千世界の中に於いて、立てば則ち遍く見れども、若し辺に在って立てば、則ち余処を見ず。声聞人は則ち爾らず。所住の処に在って、常に千世界を見、辟支仏は百千世界を見、諸仏は無量無辺の諸世界を見る。凡夫人の天眼智は、是れ通にして明に非ざるも亦、是の如く、但だ所有の事を見て、業因縁に随って生を受くることを見ること能わず。宿命の中に説けるが如し。

復次に、天眼を得たる人の中、最も第一なる者は、阿泥盧豆にして、色界の四大の造色にして、半頭清淨なるが、是の天眼なれども、仏の天眼は、四大の造色にして、遍頭清淨な

り。是を差別と為す。

復次に、声聞人は、住する所の三昧の中に於いて天眼を得、即ち住する所の三昧の中に於いて能く見るにして、若しくは有覚有観三昧、若しくは無覚有観三昧、若しくは無覚無観三昧なり。仏は隨所に三昧の中に入りて住し、見んと欲せば尽く見たまう。若しくは無覚無観三昧の中に依って天眼を得、有覚有観三昧、若しくは無覚有観三昧の中に入りて亦、能く見たまう。

復次に、声聞人は、是の天眼を用いて見る時、住する所の三昧の中の心、余の三昧に入れば、天眼は則ち滅す。仏は則ち爾らず。心は余の三昧に入ると雖も、天眼は滅せず。是の智慧もて遍く一切衆生の生死の趣く所を知りたまひ、能く壊するもの無く、能く勝るもの無し、是を第九の力と名づく。

仏は天眼で衆生の生死の処を見たまう。凡夫人は天眼で多くとも四天下のみを見る。声聞人は多くとも小千世界・上下を遍く見る。

大梵王も千世界を見るが、彼は立てば遍く見るが、辺にあって立てば余処を見ない。声聞人は、常に千世界を見、辟支仏（独覚）は百千世界を見、諸仏は無量無辺の世界を見る。凡夫人の天眼智は、「宿命智力」の場合のように、「通」であり「明」ではなく、事のみを見て、業因縁に随って生を受けることを見ることできない。

天眼第一のアニルッダにしても、その天眼は色界の四大の造色であり、半分清浄であるが、仏の天眼は四大の造色であり、完全に清浄である。

声聞人にも仏にも、有覚有観三昧・無覚有観三昧・無覚無観三昧⁽⁵⁾があるが、仏は、見ようと欲すれば、三昧の中において、天眼で尽く見たまう。

声聞人は、天眼を用いて見るとき、ある三昧においては天眼があるが、他の三昧に入れば天眼が滅する。仏は他の三昧に入っても天眼は滅しない。仏はこの「生死智力」で遍く一切衆生の生死において趣く所を知りたまう。

以上、仏の天眼（「生死智力」）の優越性が強調されている。凡夫から大梵王、声聞、独覚を経て、仏へと天眼のレベルが上がっていることが分かる。この場合、仏は一切衆生の生死の処を見るのだから、それを妨げるものはないのである。

3-6. 漏尽智力

次に、「漏尽智力」を検討する。ここでは、声聞と仏の違いが、さまざまな観点から詳しく述べられている。

漏尽智力者。問曰。九力智慧分別有差別。漏尽則同。一切声聞辟支仏有何等異。

答曰。雖漏尽是同。智慧分別大差別。声聞極大力思惟所断結生分住分滅分三時断。仏則不爾。一生分時尽断。声聞人見諦所断結使生時断。思惟所断三時滅。仏則見諦所断思惟所断無異。声聞人初入聖道時。入時与達時異。仏則一心中亦入亦達。一心中得一切智。一心中壊一切障。一心中得一切仏法。

復次諸声聞人。有二種解脱。煩惱解脱法障解脱。仏有一切煩惱解脱。亦有一切法障解脱。仏自然得智慧。諸声聞人随教道行得。復有人言。若仏以智慧断一切衆生煩惱。其智亦不耗不滅。譬如熱鉄丸著少綿上。雖燒此綿而火熱勢不滅。仏智慧亦如是。燒一切煩惱智力亦不滅。

復次声聞但知自尽漏。諸仏自知尽漏亦知尽他人漏。如浄経中説。

復次仏独知衆生心中分別有九十八使一百九十六纏。除仏無有知者。仏亦独知苦法智苦比智

中斷爾所結使性。乃至道比智亦如是。思惟所斷九解脫道中亦爾。仏悉遍知一切衆生如是事声聞若少知少説皆随仏語。仏如是漏尽智慧力勢。無能壊無能勝。是名第十力。(大正25.p.240.c-241.a)

漏尽智力とは、問うて曰く。九力は智慧の分別には差別有り。漏を尽くすことは則ち同じ。一切の声聞・辟支仏と何等の異有るや。

答えて曰く。漏尽是是れ同じと雖も、智慧の分別は大いに差別あり。声聞は、極大力にて思惟して断ずる所の結は生分・住分・滅分の三時に断ずれども、仏は則ち爾らず。一の生分の時に尽く断ず。声聞人は、見諦所断の結使は生時に断じ、思惟所断は三時に滅すれども、仏は則ち見諦所断と思惟所断と異なること無し。声聞の人は初めて聖道に入る時、入る時と達する時とは異なれども、仏は則ち一心中にして亦入り亦達し、一心中に一切智を得、一心中に一切の障を壊し、一心中に一切の仏法を得たまう。

復次に、諸の声聞人に二種の解脫有り。煩惱解脫と法障解脫となり。仏は一切の煩惱解脫有り、亦、一切の法障解脫有り。仏は自然に智慧を得たまい、諸の声聞人は教道に随って行得す。復、有る人言わく。「若し仏は智慧を以て一切衆生の煩惱を断じたまうに、其の智も亦、耗せず減せず。譬えば熱鉄丸を少綿の上に著くるに此の綿を焼くと雖も、而も火熱の勢減ぜざるが如し。仏の智慧も亦是の如く、一切の煩惱を焼くに、智力亦減せず」と。

復次に、声聞は但だ自ら漏を尽くすことのみを知り、諸仏は自ら漏を尽くすことを知り、亦、他人の漏を尽くすことを知りたまう。浄経の中に説くが如し。

復次に、仏のみ独り衆生の心中の分別に九十八使、一百九十六纏有ることを知りたまひ、仏を除いては知る者有ること無し。仏は亦独り苦法智、苦比智中に断ずる爾所の結使の性を知りたまう。乃至道比智も亦、是の如く、思惟所断の九解脫道の中も亦爾なり。仏は悉く遍く一切衆生の是の如き事を知りたまう。声聞の若しくは少しく知り、少しく説くは皆、仏語に随う。仏の是の如き漏尽の智慧力勢は能く壊するもの無く、能く勝るもの無し。是を第十力と名づく。

以上述べられた、九の力は智慧の分別には差別がある。しかし、この漏尽智力に関しては、漏尽という点については同じであるが、漏尽の智慧の力勢に差別がある。

声聞は、極大力で思惟して煩惱(結)を断じるが、その場合、生分・住分・滅分の三時に断じる。しかし、仏は、生分に煩惱を尽く断じたまう。

また、声聞人は、見諦所断の煩惱(結使)を生時に断じ、思惟所断の煩惱を三時に滅する。⁽⁶⁾しかし、仏にとっては、見諦所断の煩惱と思惟所断の煩惱とは区別はない。

また、声聞人は、初めて聖道に入るとき、入るとき(苦法智忍)と達するとき(苦法智)とは異なる。しかし、仏は、一心中に入り達し、一心中に一切智を得、一心中に一切の障を壊し、一心中に一切の仏法を得たまう。

また、声聞人には人によって二種の解脫の区別がある。煩惱解脫と法障解脫⁽⁷⁾とである。仏には一切の煩惱解脫と一切の法障解脫とがある。

仏は自然に智慧を得たまい、声聞人は教道に随って智慧を行得する。

熱鉄丸を少綿の上に着ける場合、その綿を焼いても火熱の勢いが減じないように、仏の智慧も一切の煩惱を焼いても智力が減じない。仏は智慧で一切衆生の煩惱を断じたまう。ここでは、仏の利他的な面が強調されている。

また、声聞は自ら漏を尽くすことのみを知り、仏は自ら漏を尽くすことを知り、他人の漏を尽

くすことを知りたもう。ここでも、仏の利他のはたらきが強調されている。

仏は、衆生の心中の一切の煩惱を知りたもう。声聞はこれに対して、少し知り少し説くが、これは皆仏語に随う。

以上の説明から、仏と声聞の漏尽の違いが明確になる。一番大切な点は、声聞が自らの漏尽のみであるのに、仏は他者の漏尽もなすことである。これは、一切衆生の煩惱の断滅という仏道の最終目的が仏によって最終的になされることを示し、利他の極致を示している。

また、この漏尽について、特に大乘仏教的な思想が現れている。それは、声聞は長い時間かかって順々に煩惱を断ずるが、仏は、一時に煩惱を断じ、一心に一切の仏法を獲るのである。これは、中国・日本で発展した華嚴の一即一切の思想に通ずるのである。

4. 十力の中で何が最勝かについて

十力の中で何が最勝かについて、いくつかの説がある。

問曰。是十力何者最勝。

答曰。各各於自事中。大如水能漬火能燒。各自有力。有人言初力為大。能撰十力故。或言漏尽力大事。辦得涅槃故。論者言是十力皆以無碍解脫為根本。無碍解脫為増上。(大正25.p.241.a)

問うて曰く。是の十力は何か最勝なるや。

答えて曰く。各各自らの事の中に於いては、大なること水の能く漬し、火の能く焼くが如く、各自ら力有り。有る人の言わく。「初力を大と為す。能く十力を撰するが故に」と。或いは言わく。「漏尽力大事なり。涅槃を辦得するが故に」と。論者は言う。「是の十力は皆、無碍解脫を以て根本と為し、無碍解脫をもって増上と為す」と。

十力の中では何が最勝なのか。ある人は、初力(是処・不是処力)が大とする。十力を撰するからである。ある人は、漏尽力が大とする。涅槃を辦得するからである。また、ある論者は、十力は皆、無碍解脫を根本とし、無碍解脫を増上とする、と述べる。

以上のことから、3. の各論の研究で、是処・不是処力の方が、性智力よりも済度の利他的面が強調されているのは、是処・不是処力が、十力全体を包摂する位置にあることからなのである。最勝なる是処・不是処力による完全な衆生救済(済度)こそが、十力全体の至上目的なのである。その内実は、また、同じく最勝といわれる漏尽智力による完全な自他の最終的煩惱断滅なのである。

5. 仏が無我・無所著であるのに十力を讚する理由

仏は無我であり執着を離れているのに、自らの十力をほめることがあるかどうか論じられる。

問曰。好人法一事。智慧尚不応自讚。何況無我無所著人而自讚十力。如説
自讚自毀 讚他毀他 如是四種 智者不行

答曰。仏雖無我無所著。有無量力。大悲為度衆生故。但説十力不為自讚。譬如好買客導師。見諸惡賊誑諸買客示以非道。導師愍念故語諸買客。我是実語人。汝莫隨誑惑者。又如諸弊医等誑諸病人。良医愍之語衆病者。我有良藥能除汝病。莫信欺誑以自苦困。

復次仏功德深遠。若仏不自説無有知者。為衆生所説所益甚多。以是故仏自説是十力。」
(大正25.p.241.a-b)

問うて曰く。好き人の法として一事の、智慧すら、尚応に自ら讚すべからず。何に況や無

我・無所著の人にして、而も自ら十力を讃せんや。説くが如くんば、

「自ら讃し、自ら毀り、他を讃し、他を毀る。是の如きの四種を智者は行ぜず」と。

答えて曰く。仏は無我・無所著なりと雖も、無量の力有って大悲もて衆生を度せんが為の故に但だ十力を説きたまうのみ。自讃を爲したまわず。譬えば好き賈客の導師が諸の悪賊が諸の賈客を誑わし、示すに非道を以てするを見るや、導師は、愍念するが故に諸の賈客に、「我は是れ実語の人なり。汝は誑惑の者に随うこと莫れ」と語るが如し。又、諸の弊医等が諸の病人を誑わすに、良医は之を愍んで衆の病者に、「我に良薬有り、能く汝が病を除く。欺誑を信じて以て自ら苦困すること莫れ」と語るが如し。

復次に、仏の功德は深遠なり。若し仏自ら説きたまわずんば、知るもの有ること無けん。衆生の為に説きたまう所は益する所甚だ多し。是を以ての故に仏は自ら是の十力を説きたまえり。

仏は無我・無所著であるのに、自ら十力を讃するのか、という問がある。

それに対して答えられる。仏は無我・無所著であるが、無量の力を持って、大悲によって衆生を済度するために十力を説きたまうのであり、自讃なされるわけではない。

仏の功德は深遠であり、仏自らがそれを説かれなければ、知るものがない。衆生のために説かれ、利益は甚だ多い。よって、仏は十力を説きたまうのである。

ここでは、大悲による衆生救済という利他面が強調されている。大悲は、カテゴリーの上からは、『大智度論』では、この十力の考察の少し後で、大慈大悲として論じられるが、是処・不是処力や、性智力による衆生済度には、それらの仏の智力は仏の大悲に裏付けられてこそ、実質的にはたらきをなすのである。浄土教などで、『大智度論』の要点は「智体悲用」であると一般的に説かれる根拠ともなる。また、仏は無我・無所著であるから、アートマンはなく、仏が自己をほめることは決してありえないのである。

6. 仏の十力のまとめ

最後に、仏の十力についてまとめがある。

復次有可度者必応為説。所応説中次第応説十力。若不説彼不得度。是故自説。譬如日月出時。不作是念。我照天下当有名称。日月既出必自有名。仏亦如是。不自念為有名称故自説功德。仏清浄語言説法。光明破衆生愚闇。自然有大名称。以是故仏自説十力等諸功德無有失。力名能有所辦。用是十種力增益智慧故。能破論議師。用是十種力增益智慧故能好説法。用是十種力增益智慧故。能摧伏不順。用是十種力增益智慧故。於諸法中得自在。如大国主於臣民大衆中得自在。是為以声聞法略説十力義。（大正25.p.241.b）

復次に、度す可き者有れば必ず応に為に説くべく、応に説くべき所の中に次第に應に十力を説くべし。若し説かずんば彼は度することを得ず。是の故に自ら説きたまえり。譬えば日・月の出ずる時、是の念を作さざるが如し。「我、天下を照らして当に名称有るべし」と。日月は既に出ずれば、必ず自ら名有り。仏も亦是の如く、自ら念じて名称有るを為さざるが故に、自ら功德を説きたまう。仏の清浄の語言もて説法したまえば光明は衆生の愚闇を破って、自然に大名称有り。是を以ての故に仏は自ら十力等の諸の功德を説きたまうも失有ること無し。力とは能く辦ずる所有るに名づく。是の十種の力を用いて智慧を増益するが故に、能く論議師を破り、是の十種の力を用いて智慧を増益するが故に、能く好く説法し、是の十種の力を用いて智慧を増益するが故に、能く不順を摧伏し、是の十種の力を用いて智慧

を增益するが故に、諸法の中に於いて自在を得ること、大国主が臣民大衆の中に於いて自在を得るが如し。是を声聞法を以て略して十力の義を説くと為す。

仏は、済度す可きものがあれば、十力を説きたまう。もし十力が説かれなければ、仏は衆生を済度できない。仏の清浄の語言で説法なされれば、光明は衆生の愚闇を破る。仏は、十種の力で智慧を增益するから、論議師を破りたまひ、好く説法したまひ、不順を摧伏したまひ、諸法の中において自在を得るのである。ここで、また、仏が念じて、仏の名称をあらしめるのではなく、仏の名称の功德力用は、「大名称」として自然にあるのである。ここで説かれる「名称」という語のサンスクリット語は、おそらく『無量寿経』に説かれる「名号」(nāmadheya)に相当するであろう。浄土教では、これは「大行」と説明される。

7. 結論

以上、『大智度論』の仏の十力を検討してきた中で、明らかになった重要な点(仏の優位性と利他性)について、最後にまとめて整理しておく。

まず、仏が他の衆生に比して優越していることを強調している力は、「是処・不是処力」、「業報智力」、「宿命智力」、「生死智力」、「漏尽智力」である。この検討からは、凡夫より声聞、声聞より仏が、より包括的にすぐれた智力を有することが明らかになった。これは、特に凡夫や声聞が自己中心的な狭い智慧であるのに対し、仏は他の衆生のことについても知り尽くすという大きな能力を有するということである。これは、『大智度論』の解釈においては、小乗より大乘がすぐれているという定型的な説が成り立つということを確認するとどまっている。「漏尽智力」の、一即一切的な思想には特に頓悟の般若中観的な思想が明らかに現れていた。

次に、仏の利他性(衆生救済性)について強調している力は、「是処・不是処力」、「性智力」、「漏尽智力」である。その際、済度できる衆生と済度できない衆生とを分けている点に気がなったが、「性智力」には説かれていないが、「是処・不是処力」には、今済度できない者も、仏の因縁によって[最終的に済度できる]ということが示唆されているので、そこに仏の利他的大悲が感じられた。「是処・不是処力」は十力全体を統括する最勝の力とも言われる。また、仏の「漏尽智力」には煩惱の断滅に関して自利利他のはたらきがあり、仏自身も涅槃を獲得し、一切衆生にも涅槃を獲得させるから、最勝の力とも言われる。この「是処・不是処力」と「漏尽智力」が相俟って、自覚覚他覚行窮満の大乘の理想は完成するのである。

また、十力のまとめの記述において、仏が清浄な説法をなされれば、光明が衆生の愚闇を破る、という表現が見られたが、これは、後代の親鸞の『教行信証』冒頭の「総序」の御文の「無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」という浄土教的な表現の元になっているのではないかとも思われた。また、続く「自然に大名称有り」という表現は、浄土教の阿弥陀仏の名号の功德力用の思想につながるのではないだろうか。

最後に、部派仏教の十力思想との比較が、今後の課題となるであろうと想われる。⁽⁸⁾

注

- (1) この解説の元になる当該箇所の内容は、理解しがたい。Lamotte氏の仏訳の解釈を筆者(那須)の和訳とともに提示しておく。“2. Il connaît chez les êtres les prises d'actes (*karmasamādāna*) passées, futures et présentes, et il les connaît d'après le lieu (*sthānatas*), la cause (*hetutas*) et la rétribution (*vipākatas*) : ceci est la deuxième force.” 「2. 彼のお方(仏)は、諸存在に関し

て、過去・未来・現在の諸業の受持をお知りになる。また、彼のお方(仏)は、場所に関して、原因に関して、果報に関して、それら(諸存在)をお知りになる。これが第二力である。[Lamotte 1970: 1516]

- (2) この「宿命智力」の説明において、この力で、過去のことだけでなく、未来のことも知ることができるようにも理解できるようにも思われる。もっとも、Lamotte氏は、「宿命智力」の対象は、過去のこと限定されると理解して仏訳している。[Lamotte 1970: 1516]
- (3) Lamotte氏も、「転」という語を、「転換」の意味でなく、“fonctionnement (*pravṛtti*)” 「はたらき」の意味に理解している。[Lamotte 1970: 1539]
- (4) この「無碍解脱」とは、「何ものにもとらわれない自由の解脱」という意味であろう。『仏教語大辞典』(中村元著) (「無碍解脱」の項目)
- (5) 「有覚有観三昧」「無覚有観三昧」「無覚無観三昧」とは、それぞれ、玄奘訳の用語では、「有尋有伺三摩地」「無尋唯伺三摩地」「無尋無伺三摩地」に対応する。Lamotte氏の仏訳と、それらに対応するサンスクリット語によれば、それぞれ、“concentration avec examen et jugement (*savitarka-savicārasamādhi*)” 「[粗い] 検討と [細かい] 判断を伴う集中」, “concentration sans examen mais avec jugement (*avitaraka vicāramātra samādhi*)” 「[粗い] 検討がないが、[細かい] 判断を伴う集中」, “concentration sans examen ni jugement (*avitarhāvīcārasamādhi*)” 「[粗い] 検討も [細かい] 判断もない集中」とされる。[Lamotte 1970: 1558]
- (6) 「見諦所断結使」と「思惟所断[結使]」とは、Lamotte氏の仏訳と、それらに対応する還元サンスクリット語によれば、それぞれ、“les entraves à détruire par la vision des vérités (*satyadarsanaheyaśaṃyojana*)” 「真理の洞察力により破壊すべき束縛」, “les entraves à détruire par la méditation (*bhāvanāheyaśaṃyojana*)” 「瞑想により破壊すべき束縛」とされる。[Lamotte 1970: 1560]
- (7) 「煩惱解脱」と「法障解脱」とは、Lamotte氏の仏訳と、それらに対応する還元サンスクリット語によれば、それぞれ、“la délivrance des passions (*klesavimukti*)” 「情念からの解放」, “la délivrance de l'obstacle à la Loi (*dharmāvaraṇavimukti*)” 「法に関する障害からの解放」とされる。これらは、それぞれ、唯識学派で言う、煩惱障からの解脱と、所知障からの解脱のことを指すのであろう。[Lamotte 1970: 1561]
- (8) 因みに、『大智度論』にその存在が述べられ、先行する有部の文献である『婆沙論』でも、仏の十力は説かれているが、その大部分が諸門分別に終始しており、仏の二乗に対する優位性や、利他的側面は、ほとんど述べられない。しかし、最後の二項目の問答で、二項目共に仏の二乗に対する優位性が説かれ、最終の項目で、仏の利他性が説かれる。

その問答を挙げて検討する。

「問宿住随念智死生智二乗亦有。何故唯仏建立力耶。答前説不可屈義等是力義。二乗雖有而無此義故不名力如舍利子雖入第四静慮而不知人当所生处及所從來等事。

問二乗亦有漏永尽智何故非力。答仏智猛利速断煩惱及彼余習。非二乗故。復次仏智能知自他相統諸漏永尽時分不謬。声聞独覚無如是能。復次不以自知諸漏尽故名漏尽力。以能知他無辺世界諸有情類漏尽差別。及為彼説漏尽方便明了不謬名漏尽力。声聞独覚無如是義。」(大正27.p.158.a)

「問う。宿住随念智と死生智とは二乗にも亦有るに、何が故に、唯、仏にのみ力を建立せしや。答う。前に、屈す可からず等是れ力の義なりと説けり。二乗には有りと雖も、而も此の義無きが故に、力と名づけざるなり。舍利子は、第四静慮に入ると雖も、而も人の当に所生すべき処、及び從來せし所等の事を知らざるが如し。

問う。二乗にも亦、漏の永尽有るに、何が故に力に非ざるや。答う。仏智は猛利にして、速やかに煩惱及び彼の余習を断ずるに、二乗は非ざるが故に。復次に、仏智は能く自他相統の諸漏の永尽する時分を知りて謬らざるに、声聞独覚には、是の如き能無ければなり。復次に、自の諸漏の尽くるを知ることをして以ての故に、漏尽力と名づけずして、能く他の無辺の世界の、諸の有情類の漏尽の差別を知り、及び、彼の為めに、漏尽の方便を説き、明了にして謬らざるを以て、漏尽力と名づくるに、声聞

と独覚には、是の如き義無ければなり。」記述の類似により、『大智度論』は『婆沙論』の伝統を受けていると言える。「宿住随念智力」「死生智力」「漏尽智力」ともに、仏力は他者への働きかけが重視されているのである。

参考文献

- 『大智度論』:大正25. No. 1509. 龍樹菩薩造,後秦 鳩摩羅什訳.
(本発表では検討箇所(巻第24,pp.235-241)から抜粋して論じた。).
- 『婆沙論』:『阿毘達磨大毘婆沙論』. 大正27. No. 1545. 五百大阿羅漢等造, 唐 玄奘訳.
国訳一切経, 积経論部二, 『大智度論』, 大東出版社.
- 国訳大蔵経, 論部第二卷, 『大智度論』, 国民文庫刊行会.
- Lamotte, Étienne. 1970 *Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna*
(*Mahāprajñāpāramitāsāstra*) avec une nouvelle Introduction par Étienne Lamotte
Tome III, Chapitres XXXI - XLII, Université de Louvain,
Institut Orientaliste Louvain 1970.
- <キーワード>是処・不是処力、業法智力、性智力、宿命智力、生死智力、漏尽智力

